

学生・保育現場・養成校三者が共有し合う効果的な実習を目指して

—相互に学び合える実習懇談会の在り方を探る—

聖園学園短期大学 准教授 猿 田 興 子

聖園学園短期大学 講 師 佐々木 啓 子

Aiming for Effective Practical Training Shared by students, Childcare Facilities, and Training School

— In Consideration of the Discussion Workshop with Mutual Learning —

SARUTA Kouko

Associate Professor, Misono Gakuen Junior College

SASAKI Yoshiko

Instructor, Misono Gakuen Junior College

要 約

聖園学園短期大学では、平成17年度から秋田県内の実習受入れを依頼している園・施設と本学の実習関係者が1年に1回実習懇談会で意見交換をしている。これまでの実習懇談会を振り返る中で、参加園から寄せられている事前質問を見直したところ、その内容が今後の実習懇談会の方向性を考える上で重要になることに気づいた。その一方、課題として参加園数・参加者数の減少が挙げられる。本来であれば全園・施設と共有すべき内容が参加者だけの共有に限られてしまうということである。これからの実習懇談会が魅力あるものになれば参加者の増加につながると考え、アンケート調査を含めた内容の検討が必要となる。

それに加えて共有すべき情報が受入れ園・施設の保育者と本学の二者間に留まってしまうことである。受入れ園・施設、保育者養成校、学生の三者が連携を深め、学びを共有し合い、専門性の向上を目的とした実習を目指すことを重要と考えている。保育現場が専門性向上を目指す思いと本学が目指す専門性のある保育者養成への思いが、学生の実習を通して融合されてほしい。そして三者がともに高め合える機会のひとつが実習懇談会であってほしいと願っている。

キーワード：実習懇談会、意見交換、学生、養成校、保育施設間での共有、実習指導、専門性の向上

Key words : council on practical training, exchange of opinions, sharing among students, training school, childcare facilities, instruction for practical training, improvement of expertise

目次

はじめに

第1章 研究の目的

第2章 研究の方法

1) 実習の実際

2) 実習懇談会の参加状況と質問事項

3) 実習後の懇談会から見えてきた内容と考察

4) 研究の今後

第3章 まとめと課題

はじめに

聖園学園短期大学の实習懇談会は、実習の目的とねらい、指導過程を実習受入れ園・施設に伝え、実習の質の向上に向けた連携を図るため、平成17年度以降実施されてきた。また、園・施設が学生を受入れ、指導していただくことへの感謝を伝える大切な機会でもある。その内容は開始当初から現在まで大きな変化はないが、令和元年度からは県内全実習先を3地区に分け、3年サイクルで県央は本学で、県南は2箇所、県北は2箇所と実施会場を広げている。実習は実習園と保育者養成校が協働して進めることが求められる。本学の实習懇談会を見直し今後の課題と方向性を精査したいと考え、3点に着目した。

第1点として、受入れ園・施設からの貴重な意見や質問について、実習懇談会で十分に活用できていないことである。実習懇談会の案内文書に記される質問内容は、受入れ園・施設が感じている実習記録の指導の仕方への戸惑いや学生の保育への意識の低下、本学の实習指導についての提案等、様々である。さらに実習懇談会終了後の参加者アンケートでは、「聖園短大が実習にどのような願いをもち指導しているのか、指導内容も詳細に理解できた」とか「園の実習生に対する指導が適切かどうか迷っていたが、方向性が理解できたことに安心した」という意見もある。しかしそれは、実習懇談会の参加者と本学教員の共有であり、それだけでは本来の目的である保育者の専門性につながる実習の充実に活かされていないと考えた。

第2点は、受入れ園・施設の保育者と学生が実習を通して学び合うことで、両者が専門性につながる関係性を構築してほしいということである。2018年に改訂(定)された新「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」施行以降、保育に携わる保育者の専門性が大きく取り上げられている中、保育者養成校の指導の在り方も問われている。幼稚園教諭二種免許状および保育士資格の取得を目指す学生を養成する保育科単科

である本学の役割を考えると、実習での学びが重要であることに改めて気づかされる。2年間で5回実施される実習について、学生の学びと受入れ園・施設の思いと本学の指導内容を共有し合いながら改善していくことが必要である。学生への実習指導が受入れ園・施設の保育者にとっても学びの機会となり、その結果として保育者自身の専門性向上へとつながる実習になるために、実習懇談会で話し合われたことが活かされてほしいと考える。

第3点は、本学の实習に対する目標を受入れ園・施設の保育者と養成校の教員に加え、学生も含めた三者で共有することの必要性である。これまで実施してきた実習懇談会を受入れ園・施設の保育者や学生はどのように捉えているのだろうか。実習懇談会で話された内容を授業内で実習担当教員が学生に伝え、それをテーマにグループディスカッションを行う程度で、効果ある共有化には至っていない。また、学生が実習で学んできたことや感じたことを、受入れ園・施設の実習担当者に具体的に伝える機会もほとんどない状況である。実習懇談会で共有し合った内容や実習の成果や課題について、受入れ園・施設の保育者と養成校の教員、そして学生の三者が伝え合い、次の実習に活かしていくための方法について検討したい。

以上の課題に取り組むことで、保育のやりがいや魅力を実感し、理解を深めることにつながる実習を目指し、実習懇談会を窓口として研究に取り組んだ。

第1章 研究の目的

本学では、年度内最終の教育実習・保育実習が終了した11月末に実習懇談会を開催している。この取り組みは本学独自に20年以上継続しているものであり、実習の質の向上に向けて受入れ園・施設と連携を図り、実習にとって大切なことについて忌憚のない意見交換ができる機会にしたいと考えている。また、秋田県内の幼稚園・保育所・認定こども園・児童養護施設で勤務している多数の卒業生である保育者に、本学が学生にどのような思いや願いをもって実習に向けての指導をしているのか、後輩である学生が子どもや保育者との関わりからどのようなことを学んできてほしいのかを伝え、理解してもらいたいと思っている。

しかしながら、コロナ禍以降参加者数が減少しており、多くの受入れ園・施設関係者と意見交換することができていない現状にある。参加者の減少は、単に感染症対策というばかりでなく、実習懇談会が「参加したい」、「実習生について、養成校とずっと語りたい」と思う場になっていないためではないだろうか。そこで、受入れ園・施設と本学、さらに本学学生にとって意見交換されたことが活きる、魅力ある実習懇談会の在り方について考える必要があると感じ、秋田県内の実習園・施設を対象に今後アンケートおよ

び聞き取り調査を行い、研究することとした。

第2章 研究の方法

1) 実習の実際

本学における実習は、1年次9月に教育実習Ⅰ（幼稚園、幼保連携型認定こども園）、2年次11月に教育実習Ⅱ（幼稚園、幼保連携型認定こども園）を実施している。また、1年次11月に保育実習Ⅰ（保育所、幼保連携型認定こども園）、2年次6月に保育実習Ⅱ（保育所、幼保連携型認定こども園）、2年次夏季休業中の8月から9月にかけて2班あるいは3班に分かれて保育実習Ⅰである施設実習を実施している。

2) 実習懇談会の参加状況と質問事項

実習受入れ園・施設への案内送付様式に出欠連絡とともに事前質問を記入していただいている。案内が届くことで、実習について話し合う機会になり、質問等について共有する機会につながってほしい。実習懇談会参加者に限らず、園・施設内の実習担当保育者が実習について感じていることを、できるだけ吸い上げたいと考えている。

令和元年度から令和7年度までの実習懇談会を年度別に分類している。対象地域と参加園・施設数、参加人数（カッコ内）、事前質問の内容は以下のとおりである。

【令和元年度】 県北地区（大館市、能代市）

	出席園・施設数	19園	20名
保育所	8	(8)	
認定こども園	9	(10)	
児童養護施設	2	(2)	

- ・技能、理論も大事だがより保育の心を大切にしたいと感じる。
- ・令和2年度4月より成人棟と児童棟に分かれ運営することとなった。児童は定員10名となる。
- ・聖園学園短期大学から、当園への実習生の受け入れはなかったが、今後のため勉強させていただきたいと考えている。
- ・県内の就職状況について聞きたい。
- ・実習に活かすため在学中のカリキュラムについて教えてほしい。1年生の実習時は、どのあたりまで学んでいるのか。

【令和2年度】 中央地区（聖園学園短期大学）

	出席園・施設数	42園	42名
保育所	22	(22)	
認定こども園	13	(13)	
児童養護施設	7	(7)	

- ・実習記録について。当園では直接記入してもらい、担当者が目を通した後、訂正部分に付箋を貼る等して対応している。その後、訂正された部分分かるように二重線等引き、書き直してもらうことになる。（指導された箇所がわかるように）学校側では、どのような記入の仕方が望ましいと考えているのか（下書きさせてからの清書等）教えてほしい。
- ・実習記録について。記録を日々提出してもらっているが、ページをコピーし、そこへ鉛筆書きして提出した学生がいた。こちらの判断で実習記録へペン書きして提出してもらったが良かったのか知りたい。後日見直した際、加筆・訂正のあるほうが役立つのではないか思い対応した。
- ・受入れ園に行っても実習ができなかった（コロナ禍）ことは大きな困難であるが、それに変わる実践的な学びはできたのか。
- ・4月に新設した園である。今年は実習生に周知されていないと思うが、来年からは引き受けたいので実習生を待っている。また、今年度の就職希望者も同様にお待ちする。
- ・実習に来ていただいているが、園児数減少で混合保育となっている。どのクラスに入るにしても行事以外はほとんど同じ活動になって実習生の学びになるのか心配になる。
- ・県内の就職状況について聞きたい。
- ・実習に活かすため在学中のカリキュラムについて教えてほしい。1年生の実習時は、どのあたりまで学んでいるのか。

【令和3年度】 県南地区 (横手市、大仙市)

出席園・施設数 29園 29名	
保育所	19 (19)
認定こども園	8 (8)
児童養護施設	2 (2)

- ・実習記録について。一日のねらい(視点)をもって実習していることがわかる記録の書き方が実習生も園側もより共有できると思う。
- ・実習におけるICTの利用について、具体的な導入内容の検討をしてほしい。リアルタイムで実習生の状況確認や指導の調整が行えるとよりよい実習期間になると思う。
- ・学年により観察実習・部分実習・参加実習・全日実習を何時間行うか決まっているのか。
- ・日案以外(月案・週案)を学んでいるのか。
- ・今年就職状況について聞きたい。
- ・学生の出身地・卒業後の勤務地・実際に保育現場に就職する割合等について聞きたい。
- ・“園に任せる”ということが多く、学校側の指導はどうしているのか(記録の修正の仕方等)。評価の項目が多く、何を基準にして評価をすればいいのか迷う。(評価5や4は、どのような姿なのか)
- ・実習生のフレッシュな目線での意見を参考にしている。
- ・実習で学生が心がけていることについて教えてほしい。

【令和4年度】 県北地区 (大館市、能代市)

出席園・施設数 12園 12名	
保育所	4 (4)
認定こども園	6 (6)
児童養護施設	2 (2)

- ・卒業する学生の県外流出の割合や直近の就職状況等に関心がある。
- ・2年生の部分・責任実習の場合、“子どもの主体性を考える保育”を行うために一斉保育を推奨しない。指導する側として、どのようにしたら良いのか。

【令和5年度】 中央地区 (聖園学園短期大学)

出席園・施設数 63園 63名	
幼稚園	8 (8)
保育所	22 (22)
認定こども園	13 (13)
児童養護施設	7 (7)

- ・設定保育を前提とした指導計画の立て方・指導方法に迷う。(他園の状況を知りたい)
- ・土曜日の実習取り扱い、実習生の休憩時間の取り方(他園の状況を知りたい)
- ・実習記録の記入時間や休憩時間の取り方(他園の状況を知りたい)
- ・保育を学ぶ姿勢はもちろんのことだが社会の中のマナー(挨拶・言葉・行動等)も大事である。保育者たちも不適切なことがないようにしていきたい。
- ・学年によりそれぞれねらいをもって実習に来ていると思う。その中で戸惑いを含め感じたことが話しやすい雰囲気をつくるようにしている。実際に実習をするに当たり、不安等どのようなことを感じているのかを事前に知りたい。
- ・実習記録について。修正箇所について迷う。二重線を引いて修正した方が、後から見返したときに良いと思うがどうか。
- ・昨今、SNS等で人と人とが簡単につながる状況です。個人情報についての取り扱いを含めどのような指導(どのような科目で、具体的に)学生は学んでいるのか。
- ・学生が就職をする中で重要視していることは? 県内外の就職率や就職業種の傾向は?
- ・未満児保育園への実習時期は? 学生の0、1、2歳児の保育実習に対して求める内容は。
- ・他種施設での実習プログラムについて知りたい。
- ・実習記録の内容が良かった。今後の参考にしたいと思った。
- ・実習記録の記入の仕方はどこまで統一されているか。施設側はどこまで指導すべきか。

【令和6年度】 県南地区（横手市、大仙市）

出席園・施設数 21園 22名	
保育所	11 (12)
認定こども園	10 (10)

・生活態度（挨拶・言葉遣い・座り方・実習記録での文字や文の使い方）等を含め、学校ではどのように指導されているのか。“本当に保育者になりたいのか？”と思えるような実習生が時々いる。担当保育教諭は忙しい中の指導のため、どこまでどのように指導して良いかたいへん悩む。質の高い保育者養成のために、実習懇談会を開催していただき感謝している。

【令和7年度】 県北地区（大館市、能代市）

出席園・施設数 5園 5名	
保育所	1 (1)
認定こども園	3 (3)
児童養護施設	1 (1)

・日頃より北秋田の教育保育をお支えいただき感謝している。少子化に歯止めがかからないまま、過去数年間の出生予想を下回る現状が続く、教育・保育現場では入園園児数減により閉園、合併を考えなければならない現状に頭を抱えている園が増えている。地域と連動した新たな教育保育の形（多機能）を模索している園も少なくないと考えている。今始まったことではないが、子ども主体、人権擁護、遊びの保障、インクルーシブ保育、ウェルビーイング、多様な考え方もつ特性を認め合い、自己肯定の上でその得意分野をさらに磨きあげていくと考えた時、限られた保育士養成期間の中で、学生自身の特性を助長するような取り組み教えていただきたい。

・来年度8～9月に2名の受け入れ予定となっている。よりよい実習となるよう会に参加した。

3) 実習後の懇談会から見てきた内容と考察

令和元年度から県北・県南地区における実習懇談会を2箇所での開催にしたことで、それ以前より細かく、学生の具体的な姿を基に話し合いができるようになった。その中で、受入れ園・施設と本学の実習に対しての意識の違いが見えてきた。もちろん、双方ともに実習が学生1人1人の学びになってほしいという願いは共通している。しかし、実習終了後に学生から実習状況の聞き取りをすると、受入れ園・施設と本学、双方の意識に齟齬が生じていると感じられる。

1年次の実習事前指導では、保育の知識や技能が十分ではない学生たちが実際の園生活において子どもの魅力や子どもと生活する喜びを実感することや、子どもの成長・発達のために保育者が行っている配慮や援助を学ぶことを目標としている。しかし、実習懇談会の際に受入れ園・施設側からたびたび話題に上る「実習態度の悪さ」や「意欲」、「積極性」等、実習のマニュアル的事項の指導を優先しがちとなり、本来ならば実習で最も体感してほしい「保育のすばらしさ」を意識できる授業内容にはなっていないのかもしれない。また、2年次では、日々の子どもの関わりや責任実習への取り組みの中で自らの保育を省察し、保育者になるために必要な知識や技能を身に付けることが意識できるよう指導をしたいと考えてはいるが、指導計画作成の指導が主になってしまい、「実習を楽しむ余裕や気持ち」をもてないことも確かである。子どもと関わる経験が少ないため見通しをもつことが難しく、そのため失敗が多いのは当然のことなのに、学生たちの中に「実習への不安感」が増大し、期待感を上回ってしまうのかもしれない。そうであれば、実習懇談会で意見交換されたことが実習事前指導に活かされているとは言えないのである。

一方、受入れ園・施設の中には、学生ではあっても近い将来保育者になる者として即戦力を期待している様子も見られる。受入れ園・施設からは「実習生が良い保育者に育ってほしい。そのために保育の様々な業務も経験してもらっている。」と、様々な保育業務を手伝う機会をいただいている。しかし、そのことが学生にとって過度な負担となり、結果的に実習記録の作成時間の減少につながる場合もある。「睡眠時間が十分に確保できない」、「実習がつらかった」という学生からの振り返りも見られ、実習への負担感につながっているように感じる。「実習が楽しい」と感じられる状況でなければ、「学びとなった実習」という充実感にはつながりにくく、保育者になりたいという熱意ももちづらいものと考えられる。

また、学生と受入れ園・施設との間に生じる齟齬として感じている「実習」と「就職」の関係性について本学では、「実習は授業の一環であり、就職とは区別されるもの」という意識であり、学生にもそのように指導している。しかし、実習から就職につなげたいと考えている園・施設もあ

り、実習中に当該園への就職の意思の有無を確認されるケースもあった。保育現場の人手不足が原因であることは理解できるが、実習中に就職の誘いを受けることは、学生にとって大きなプレッシャーになることもある。受入れ園・施設と本学、お互いの立場の違いにより、なかなか話題に取り上げることができかったことではあるが、学生が平常心で実習に取り組むためには、受入れ園・施設にも了解を促す必要があると考える。

以上の養成校がもつ受入れ園・施設への要望とともに学生の効果的な実習を目指す観点も実習懇談会を活用して周知に努めていくべきである。実習懇談会で得た情報や学びを実習指導につなげていき、それが実習内で活用されることで学生にも受入れ園・施設にも有益な実習になるものと思われる。

『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2』には「養成校と現場での理解促進のための定期的な懇談会や共同での研究会参加、実習指導者研修の充実が求められる」とある。⁽¹⁾ 本学がこれまで指標としてきた内容に留まらず、現場の保育者と養成校がともに理解し学び合える場や内容を設定していくべきと考えている。

本学における実習懇談会20年を振り返ると、令和元年から参加者の交通の利便性を考慮し、県南地区を2箇所・県北を2箇所と懇談会場を増やしたが、コロナ禍の影響もあり参加園数・参加者数は減少している。受入れ園・施設との連携のため、あるいは協働的な関係性を構築するために本学が重要と考えている実習懇談会であるが、受入れ園・施設側では、毎年内容に変化がないのであれば再度参加しようという意欲につながらないことや参加すること自体に魅力を感じない等の理由により参加者が減少していることが考えられる。

その反面、本学は参加した園・施設数が少ないことで緊密に意見交換ができるメリットを感じている。実習懇談会に参加した保育者から、実習の中で学生から聞いていた情報が、本学で指導している内容と違っていたことを確認でき、明確になったという声が聞かれた。少人数であるからこそ自園の実習指導について躊躇せず話してくれ、本学もその意見を基に学生にとってより良い実習環境について相互に意見を交わす好機となったように感じる。

参加人数の減少という課題に取り組むとともに参加者が連携できたことや学生を通して自分たちの保育や実習指導について気づくことが多い有意義な実習懇談会を企画すべきである。

4) 研究の今後

ここまで本稿では、これまでの本学の実習懇談会を養成校としての立場から振り返ってきた。

毎年寄せられる意見や要望を改めて確認しながら、実習懇談会への参加者を増やしたいという単純な結果だけな

く、多くの園・施設の保育者の意見を聞いて、興味をもてるような実習懇談会にする必要性を感じている。

実習懇談会は、受入れ園・施設と本学教員が実習を中心として対面で語り合うこと、実習での疑問や悩み、気づきだけを伝えるのではなく、互いの思いや意見を語り合う機会と捉え、受入れ園・施設、養成校に加え、学生の三者がともに学び合い、育ち合える場にしたいと思っている。改めて異なる立場ごとに、どのような実習を求めているのかを整理するため、アンケート調査を実施する。実習懇談会に参加したことがある園・施設だけでなく、「参加したくてもできない」、「実習懇談会にあまり興味をもったことがない」という園・施設の保育者の声も広く知ることができたらと感じている。従来通りの型にはまった懇談会ではない、受入れ園・施設、本学、学生にとって有益な実習につなげていくための開催内容を熟考したい。

アンケート調査の内容は資料1として示している。なお、アンケート調査内にある点線の囲みはアンケート作成にあたり、意図した事項である。

また、アンケート調査とともに受入れ園・施設への聞き取り調査も今後予定している。実習懇談会の開催場所から比較的遠隔地であるため参加しにくさを感じている、最近実習生を受入れた、実習懇談会には参加したことがない等、様々な立場の園・施設を対象として対面で聞き取り調査したいと考えている。多くの意見を聞くことで、より詳細に相互の現状を知り、実習懇談会の改善・充実につながる研究を進めていきたいと考えている。

【7】 県北、中央、県南各地区の3年サイクルで開催している実習懇談会の回数は適切だと思いますか

- ① とても適切だと思う ② まあまあ適切だと思う
③ あまり適切だとは思わない ④ 適切とは思わない

【8】 【7】 の回答の理由や開催回数についてのご意見をお書きください

例) 3年サイクルではなく、毎年実施してほしい 実習毎に実施してほしい

【9】 県北2か所(大館、能代)、中央1か所(本学)、県南2か所(大仙、横手)で開催している実習懇談会の場所は適切だと思いますか

- ① とても適切だと思う ② まあまあ適切だと思う
③ あまり適切だとは思わない ④ 適切とは思わない

【10】 【9】 の回答の理由や開催場所についてのご意見をお書きください

例) 開催場所まで遠いため出席しにくい 1地区2か所にする必要はない
 たくさんの園の情報が知りたいので、以前のように中央地区1か所開催がいい

【11】 これまで実習懇談会に参加いただいた職員の方がお答えください

実習懇談会は実習指導に役立ちましたか

- ① とても役立ったと思う ② まあまあ役立ったと思う
③ あまり役立ったとは思わない ④ 役だっていない ⑤ 参加したことがない

【12】 具体的にどのような点が役立ったのかをお書きください

実習指導に本学の実習懇談会の内容が活かされているのかを尋ねたことがなく、それでは双方向の学びにつながらないことを懸念して【11】を設定した。どのように役立っているのかを具体的に記述していただくのが【12】である。

【13】 実習懇談会の内容についてうかがいます。各項目について1つお選びください
(○をつけてください)

	とても必要	まあまあ必要	あまり必要ではない	必要ない
実習の位置づけ、カリキュラム				
実習に対する本学の思い				
実習後の学生のふりかえり、自己評価				
指導計画作成上の学生の現状				
実習中の指導に困った事例				
他園との情報交換				
実習評価の基準				
実習園から本学への要望				
本学から実習園への要望				

【14】 上の内容以外で、さらに詳しく意見交換したいことをお書きください

本学では重要と捉え、[実習の位置づけ、カリキュラム]、[実習に対する本学の思い] は毎年伝えているのだが、参加者から「学生の“今”が知りたい」という声があった。受入れ園・施設側の興味や知りたい情報と本学が発信する情報が一致していない場合もあるため、【13】を設定して受入れ園・施設の思いを把握したいと思った。

【15】 聖園短大や実習生についてお気づきのことや要望等をお書きください (実習懇談会の内容以外のことでもお書きください。実習事前事後指導の参考にさせていただきます)

【13】の表中にある内容以外で、さらに詳しく知りたいことや意見交換したいことについての質問が【14】、【15】である。本学の実習担当教員には気づけなかったことを保育現場から示していただけることで、保育現場の視点で学生の指導に活用できると考えている。

第3章 まとめと課題

これまでの実習懇談会を振り返る中で、筆者らはその意義を大切に臨んでいるつもりだったが、養成校として実習懇談会を開催し参加園・施設に実習事前事後の指導内容や学生の状況を伝えることで満足していた。同時に参加人数の増減や事前の質問事項へ対応するためにはどのような準備が必要か等に捉われていたように感じる。実習懇談会全体の望ましい在り方や内容について丁寧に分析・評価しながら次回の実習懇談会につなげていく必要性を改めて感じている。

この研究は当初、受入れ園・施設との連携を図ることや実習懇談会への関心を高め、参加したくなる内容を探ること、受入れ園・施設と本学のより良い関係性構築が学生の实習に還元されることを目的として始めたものだったが、それだけに留まらない広がりがあった。

受入れ園・施設が決定するまでの経過についても再考するきっかけとなった。1年次5月当初に教育実習ⅠとⅡの実習先、6月当初に保育実習ⅠとⅡの実習先、7月末に施設実習先を各自が情報収集し、学生自身が選択することから始まる。それを受けて実習担当教員が受入れ園・施設に内諾を求める電話連絡を行う。その後、実習担当教員が受入れに不都合のある園を学生に伝え、移動等人数他調整を行う。事務的な対応は本学事務局に移行し「今年度の実習と次年度依頼」文書を送付、受入れ園・施設からの返信をまとめて、最終的な実習名簿を作成し、学生への周知という流れとなっている。現在の状況では、入学間もない学生が実習というイメージをもてないまま実習先を選択すること、特に2年次の実習先まで選択することは見通しもなく、とりあえず選択することになってしまう。受入れ園・施設から「他県養成校の実習生と重複してしまうために実習の受け入れはできない」と断られてしまうことを懸念して、選択の時期が早くなっていることが理由である。

実習懇談会の意見交換にて参加園から「1年生時点で実習先が決まっていることで学生が実習した園で2年生でも体験したいと希望するときに困るのではないか」、「2年生進級後、就職を意識して実習したいときに選択できたらいいのではないか」等の提案もあった。学生が就職を考える選択肢のための実習ではないことを実習懇談会で説明しているが、学生自身に適した実習先を選択できるシステムと時期を再考する必要性を実習懇談会における意見交換から強く感じた。

実習懇談会開催に向けての事前質問には、本学の指導内容や本学の受入れ園・施設に対する要望、実習記録に対する指導方法の周知等の質問や提案が多数寄せられている。当初は受入れ園・施設が学生に望む保育に対する姿勢や社会性の有無等に意見が寄せられるものと覚悟したが必ずしもそうではなく、実習する園に起因する指導の違いや共通

点を確認したい、評価の基準を十分に理解できていないため、他の園の評価方法についても知りたい等、実習懇談会で実習指導についての情報を互いに公開し、意見交換を望んでいるように感じた。

本学では責任実習に向けて、設定保育の指導計画の作成を課しているが、「学生が作成した指導計画を基にした保育では子どもの主体性を尊重していないのではないか」という意見もあった。それまで実習懇談会ではあまり取り上げられなかったことが事前質問を設けることで、受入れ園・施設でも疑問をもったり不安を感じたりしていると認識できた。

受入れ園・施設は実習を受入れる意義をどのように感じているのかと考えた。現場の保育者からは、「自身の日々の保育を振り返る機会となる」、「学生の実習記録に目を通すことで新たな子どもの姿を知るきっかけとなる」、「日々実習生と語る中で新たな自分の保育観に気づく」等の意見が寄せられた。学生のための実習ではあるが、現場で勤務している若い保育者の人材育成の意味もあることがわかる。実習の指導を担当した学生に対して、「将来の保育者として、学生のうちから保育の仕事に関心をもち、理解を深めてほしい」と願う気持ちをもつことも含まれている。

しかし、現在の実習懇談会では、受入れ園・施設が「実習生を受入れて良かった」、「受入れ園・施設職員も実習生と一緒に成長できた」という達成感や充実感につながる深い学びの機会とはなっていないことが残念に思われる。

大塚氏は「保育実習を異なる立場の者が関わる出会いの機会として捉え、その出会いを通して対等に学び合う姿勢、高め合う姿勢をもつことが、良い実習につながると考えた。」と『保育実習を通した実習生・保育者・養成校の協働的学び』の中で述べている。⁽²⁾ 実習懇談会で意見交換されたことが受入れ園・施設の保育の質の向上、本学の実習指導の充実、学生の保育者としての専門性の向上につながるものと期待できる。

もうひとつの課題として、実習懇談会で意見交換された内容は参加園・施設の参加者と本学教員のみのものであることが挙げられる。実習懇談会への参加者は、年々減少しているため、実習懇談会の中で意見交換された内容が受入れ園・施設、養成校、学生の三者にとって重要なことであれば、実習の受入れをしていただいている園・施設すべてと共有し、次回参加を促すためにも伝達する必要がある。意見交換からの学びを多くの園にどのように伝えるのかについても検討しなければならないと考える。

受入れ園・施設と本学が日頃ゆっくり意見交換する機会をもてない状況の中、互いの思いを伝え合う貴重な機会となる実習懇談会の望ましい在り方を探るためにも、県内の受入れ園・施設を対象にアンケート調査および聞き取り調査を行い、その調査結果を精査・分析し、実習懇談会の充実を図り、受入れ園・施設とのより良い関係性の構築につ

学生・保育現場・養成校三者が共有し合う効果的な実習を目指して —相互に学び合える実習懇談会の在り方を探る—

ながることを目指したいと考えている。その結果として参加者が増加し、さらに実習受入れ園・施設が「参加してみたい」と思えるような実習懇談会の開催につなげていきたい。

<引用文献>

- (1)一般社団法人全国保育士養成協議会（2018）『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2』中央法規 p.173
- (2)大塚紫乃・高村真希・浅香聡彦・新保雄希・境佑二（2025）『保育実習を通じた実習生・保育者・養成校の協働的学び』江戸川大学紀要第35号 pp.353 - 361

<参考資料>

聖園学園短期大学『実習の手引き』（2023）